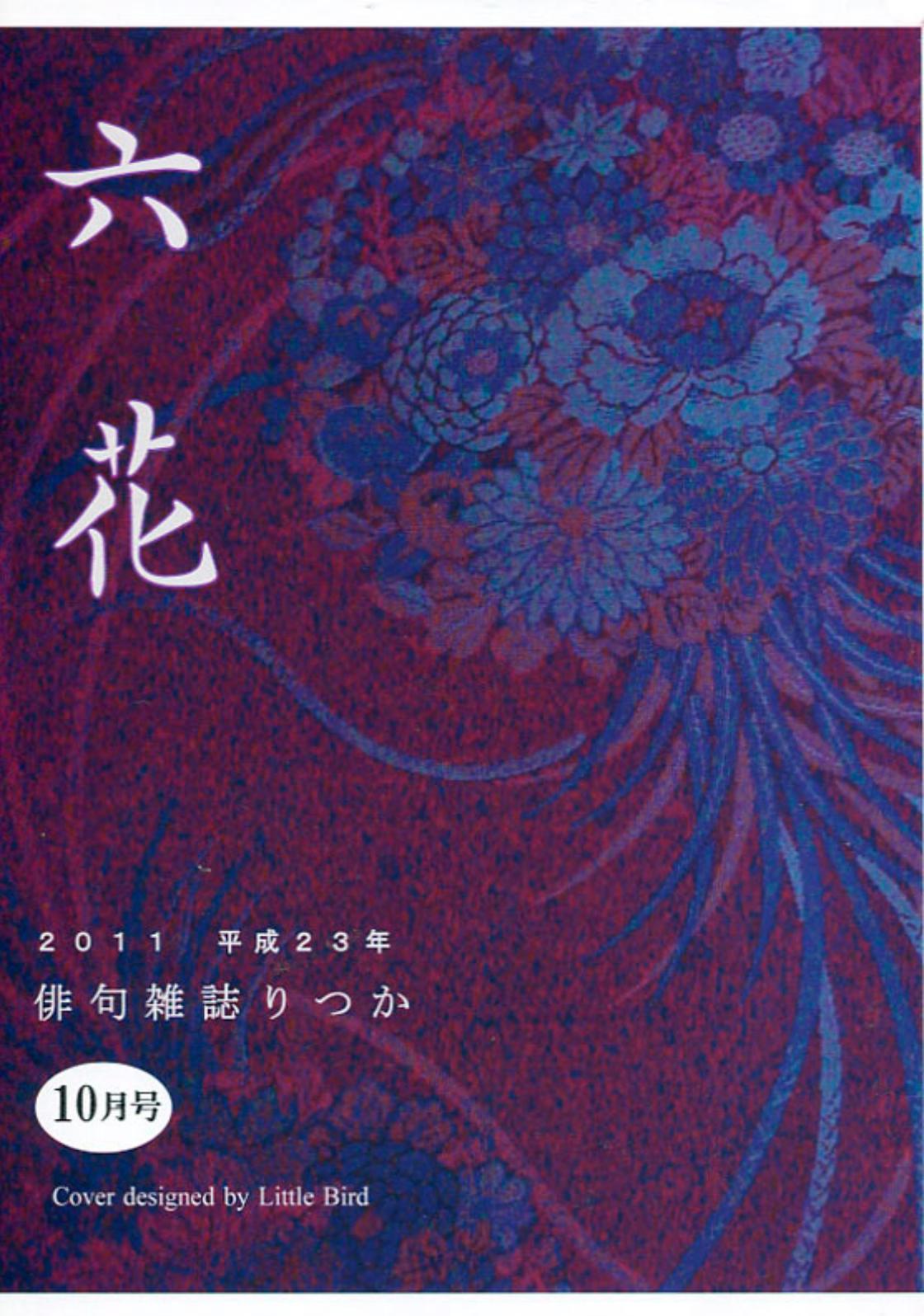


六 花



2011 平成23年
俳句雑誌りつか

10月号

Cover designed by Little Bird

こ 木の実独楽夜の机を転がれる
め 雌鶏の喉締めて鳴く十三夜
の 伸びきつてをりたる畑の鳥威
た 体当たりしてくる犬や月の霜
か 重ねては稲を抱き上げぬたるかな
い 糸尻でナイフ研ぎぬる虫の夜半
と 取りこぼす零余子の粒の歪なる

き 傷付きし柿を手のひらにて磨く

ふ 船底をつつきぬる魚秋闌くる

た 太刀魚の波打ちながら釣られけり

ご ごろごろと燈下親しみみたりけり

を 屋上に物干す患者秋日和

う 歌心なきにしもなき鹿ぞ鳴く

む 虫細る晚酌の間となりけり

雪華抄

真葛ヶ原

ことり

と 遠ざかる虫の音たぐりよせむとす
い 稲妻に切り取られては目覚めけり
か 柿青し初秋の日にまみれゐて
た 颱風とともに過ごせる夜更かな
の 残る蝉遠く聴きゐるばかりなる
め 名月に窓を閉ざして眠りけり
こ 漕ぎ出づや無月の下の白波に

き 錦秋や雲を隔てる山の嶺

ふ ふと指にからみつき来る秋思かな

た 焚く香に行方を示す秋の風

ご ごつそりと真葛ヶ原のくつがへる

を 折れ垂れて葛黒々と散らずあり

う 空蟬を残せる枝にも秋冷来

む 虫の音にまぎれ消えゆく声ひとつ

明易や鎖引きずる音のして

平居滯子

あけやすやくさりひきずるおとのして ひらひ みおこ

振花のねぢれながらも空へ伸ぶ

くちなしの匂へる夜をもて余す

片陰に誘はれてより道連れに

娘が贈り夫が残せし籠枕

明易というのは短夜の傍題で、文字通り夜が短く朝が早く来ること。暑くて寝苦しく、寝たか寝なかつたかはつきりしない状態で朝を迎えるから「もう夜が明けたのか」という状態。その朦朧とした状態で鎖を引きずる音を聞いている。その音がうつつの夢の中に入り込み悪夢と重なる。悪夢から逃れようともがいて目が覚めたが、現実の戻っても鎖を引きずる音はまだしているの。鎖を引きずる音という題材は珍しいが、けっして特殊性をねらったものではなく、自ずと経験から出来たのがあるが、読者も悪夢の世界に引き込まれていくような不思議な作品。

職人の鉢巻きのまま三尺寝

江見 巖

しよくにんのはちまきのみまさんじゃくね えみ いわお

蝉時雨安倍晴明塚ゆるぐ

街の灯を落とし五山の霊送り

兜花口のとざさる古墳かな

鉄橋の消えたる音や秋彼岸

「三尺寝」とは「昼寝」のことで、夏、太陽の影が三尺ほど移動する程度の時間、昼寝をすることを言う。三尺というのはおともと古代中国で、長さ三尺の竹筒に書く定めだったことから来ているという。三尺というのは日本においてもなじみの深い単位。特殊なところでは「三尺の秋水」といつて長さ三尺ほどの、とぎ澄ました剣のことをもいう。さて掲句働き者の職人が、寸暇を割いて取った昼食後の昼寝であるから「鉢巻きのまま」と詠んだのである。が一方で鉢巻きをしたら顔が床でべたつかない知恵でもある。ユーモアと味わいのある作品。

噴 水

松本文一郎

噴水や位置をかへても相似形
夏めくや骨董店の灰白く
大輪の薔薇に頬ずりハイチーズ
薔薇咲くやふと蘇る師の至言
踏み洗ふ夏合宿の柔道着

夏に病む

貝森光洋

夏に病む萎れし風を身にまとい
顕微鏡大手を振ってカビ殖える
まいまいの左回りと右回り
天帝をくすぐりにゆく積乱雲
呑み助も下戸もいるらし墓洗う

せつじゆしゆう
雪樹集

螢

永田万年青

叢に灯を強めたる恋螢
ほうたるの星へ向ひて消えにけり
夏鴨の首をすぼめて動かざる
梅雨荒れや水の碎ける屋根瓦
海岸の涼嵐の中塵拾ふ
傘の柄を両手で持てり男梅雨

(訂正追加)

花ブラシ

志方

章子

見て飽きぬ未央柳の蕊なりき
母の忌を過ぎて花買ふ梅雨曇
花ブラシ明るし雨の六月来
香水を纏ひてしなをつくりけり
子等来ると作りすぎたる蕨餅

蛍雪譚 六甲

天空へ夜店の灯火さかのぼる

梶浦玲良子

夜店は夏の夜間納涼を兼ねて路上で物を売る。子どもばかりでなく大人も童心に還って子ども以上に喜ぶ。夜店の特徴のひとつは、照明が普段の家庭とは違い裸電球などを使う。素朴な明かりに人は郷愁を誘われる。その光は出店の天幕を通して夜空に上っていくのである。この句で特に注目するのは「さかのぼる」という表現をとっていることである。「さかのぼる」とは「川の上流に向かつて上る」ことを言う。が、第二義に「過去または根本にたちかえる」という意味も含んでいるから使った言葉ではないか。さかのぼるとは「ノスタルジー」（懐旧の念・郷愁）をも指しているのである。玲良子さんらしい隠し味をつけた作品。

「群青の海膨済と慰霊の日」は筆者は真間にして「慰霊の日」の季語を知らず。しかし、これは「表に季のあらざれど、内に季あり」の作品として終戦記念日や敗戦日と推量も出来るかとも思うが、このたびの津波被害の東北大震災とも解釈出来るので季語をはっきりと入れた方読者が迷わなくていいのではないか。